

指 導 標 雑 感

3月、奥多摩町役場からガイドの会に登山道点検の依頼があった。会員が分担して7コースを点検山行をした。私達のパーティーは六ッ石山を担当、当日は生憎の天候で細かな雪が降りしきり中のスノーハイクとなった。

水根口から山頂へ、山頂は一面の白い広場、私達5人だけの誰も居ない雪原。ここでふと気になったのは、六ッ石山の山頂と確認できる標識が無く、初めて登って来た人には判らないのではと心配になった。

山頂にある指導標の表示は水根（バス停）・反対方向は鷹ノ巣山・奥多摩駅となっている。柱には誰が書いたか六ッ石山・1478と小さく書かれてはいるが、これでは心許無い。山頂から石尾根の縦走路へ下った所の指導標には六ッ石山山頂をへて水根と方向を示している。今にして思えば、昨年の春の頃、縦走路から上って来た登山者が山頂を素通りして水根方面へ行き、暫くしてから戻って来た。頂上と判らずに下り、おかしいと気がついたものと思われる。六ッ石山は奥多摩でも人気のある山だ。初心者の人も登ってくる。事故を防ぐためにも山頂を示す大きな標識を早急に設置してほしい。とは言っても、指導標の設置がやたら多すぎると言うご意見も有る。重複して建ててある場所もあってウルサイと感じる事も否めない。しかしながら、奥多摩には地図を持たない登山者もいて、現状からすれば事故を未然に防ぐためキメ細かな指導標は必要であるキヨクと考える。

会員の清久さんが所属している山の会【マタタビ会】では毎年、道志山塊の鳥ノ胸山（標高＝1207.8m）の登山道整備・指導標点検を実施している。今年は指導標を木製からアルミ製に取り替えるとの事でお手伝いをした。いくらアルミ製とはいっても柱は長く、山道を歩くには難儀をした。この様な地道なボランティア活動を続けられる事は誠に素晴らしく、一登山者として感謝したい。

今から約40年位前の、昭和41年にも指導標設置の作業に関わった事がある。

所属していた奥多摩山岳会の会員に東京都の職員の方がいた。その方が公園を管理する部署から指導標設置の協力依頼を請けて来た。

多摩川の左岸一帯で、高水三山から北へ長沢背稜方面までの広い地域であった。

私は当時、茨城県の土浦支店へ転勤していたが参加した。その頃の土曜日は半ドン勤務で午前中まで勤め、その日の夕方には日原に入った。途中でオカンをして長沢背稜に入山した。

穴掘り道具のツルハシ・スコップと、指導標の部材と、とにかく重かった。柱は2m位の軽量鉄骨のアンクル・方向指示板は分厚い無垢の木材でこれが特に重かった。柱は長く、立木が邪魔で稜線まで運び上げるのが厄介で往生した。岩だらけの地面を掘るのがこれまた一苦勞で、仲々掘進まず大変な思いをした。今でも僅かながらアンクルを使用した古い指導標が残っている。見掛けると懐かしくガンバレと声を掛けたくなる。

最近、奥多摩町の町内で奥多摩産の檜材を使用した指導標をよく見かける。デザインも良く文字もはっきりしていて読みやすい。惜しむらくは、方向を示す赤の三角印が鈍角で鋭角が下を示していて紛らわしい。御岳山近辺の指導標は一見同じ様であるが、方向を示す赤の三角印は鋭角ではっきりしている。指導標の文字の下にはローマ字が併記されていて外国人にも判りやすくなっている。ゴールデンウィークの時、観光案内所へインド人の8人グループがむかし道を尋ねて来た。片言の日本語で何とか会話は成り立ったが、羽黒三田神社の下の入り口まで案内して、指導標にローマ字表記が無く少々困った。

今後、ますます外国人が奥多摩に来られると思う。パンフレット類も含めて、対応策を講じてほしい。

【奥多摩観光協会・ガイド・古谷 省二】